

区内在住・在学のパラリンピアンが語る

～ みんなでつくる東京 2020 パラリンピック ～

本日、としまセンタースクエアにて、「パラリンピアンが語る～みんなでつくる東京 2020 パラリンピック～」が開催され、北京パラリンピック・柔道に出場した初瀬勇輔（はつせ ゆうすけ・36 歳）さんとロンドンパラリンピック・ゴールボール金メダリストの若杉遥（わかすぎ はるか・21 歳）さんによる講演が行われた。

本イベントは、パラリンピックを経験した障害者アスリートによる講演を通し、2020 年東京パラリンピックの障害者スポーツに対する理解を深めるとともに、地域にはどのような準備が求められているのかを理解し、障害の有無に関係なく誰もが活躍できるまちづくりを目指すことが目的。

本日は、区内在住でもある初瀬さん、区内大学在学中の若杉さんが対談を行った。

初瀬さんは長崎県佐世保市出身。大学在学中に緑内障により視覚障害となるが、高校時代に打ち込んだ柔道を再開することで障害を克服。2008 年の北京パラリンピックに出場。

若杉さんは、東京都青梅市出身。中学 2 年の時に視力を失いゴールボールに出会う。2012 年のロンドンパラリンピックでは金メダル。2016 年のリオデジャネイロパラリンピックにも出場している。

対談で初瀬さんは「視覚障害者柔道のルールは、組んで始まること以外ほとんど同じ。障害者と健常者も一緒にできるスポーツで、畳の上では平等」と、若杉さんは「アイシェードを付けることで、障害の程度に関わらず、健常者ともプレーできるのが魅力」とそれぞれのスポーツについて語った。初瀬さんから若杉さんへ「15 歳でゴールボールを始めて、17 歳のロンドンで金メダル、それってずるいね」の発言には会場内が笑いであふれ、その後、若杉さんの金メダルが来場者に回覧されるというサプライズも。2020 年の東京パラリンピックに向けて、初瀬さんは「年齢的にぎりぎりチャレンジできることに喜びを感じている。一番高いところを目指したい」と、若杉さんは「自国開催のパラリンピックに自分自身が出場できるようしっかりと練習をしていきたい」と抱負を語った。また、若杉さんが駅のホームから転落した経験があること受け、初瀬さんは「金メダリストでもホームから転落することがある。共生社会に向けて、障害のある方に、ぜひ一声かけてほしい」と語った。

金メダルを手にした 20 代の男性は「想像以上に重く、点字も刻印され、配慮されていた。二人とも途中で障害者となったのに、くじけずに頑張ったところがすごい」と感想を語った。

日 時 平成 29 年 2 月 16 日（木）10:30 ～ 12:00

場 所 としまセンタースクエア（南池袋 2-45-1 区役所 1 階）

写 真
*写真はメ
ールで送り
ます



対談の様子



若杉さん（左）と初瀬さん（右）

問 合 せ 障害福祉課